

OECD 教育研究革新センター編著、小泉英明監修「脳からみた学習 - 新しい学習科学の誕生」明石書店 2010年12月13日刊を読む

英語(外国語)教育、教員養成プログラムに必要な要素は何か

1. まず、英語教育には EFL(外国語としての英語)と ESL(第二言語としての英語)の 2 つの種類があることを述べておく必要がある。EFL の成人学習者は、日常では英語を使用しない国の居住者である。私が EFL 教育の教師として赴任したのは、メキシコ、フランス、ヨルダン、パレスチナ、インドネシア、オランダである。これとは対照的に、ESL の成人学習者は、移民や留学生として英語社会(私が教師経験があるのは、カナダとイギリスである)に身を置いており、日常的に英語を使いこなすことを必要としている。
2. また、私の英語教育業務の中に、いくつかの国(ヨルダン、メキシコ、インドネシア、カナダおよび中国)での、EFL や ESL のクラスの英語教師になるための教員養成講座の指導も含まれている。その講座には、言語教育の経験がまったくない人が英語教師になる準備を行うもの(未経験者コース)と、すでに英語教師として働いている人のスキル向上をはかるもの(実務者講座)がある。
3. 国も期間も異なるそうした業務で一貫して見えていたのは、一本の赤い糸、つまり、成人も学習可能だという豊富な証拠である。成人の脳はもはや学ぶことはできないという俗説(本論文では「欠陥モデル」と呼ばれている)は、私の周囲で何度も目のあたりにした学習の成功例によって誤りであると証明された。20代前半の成人であろうと、その2、3倍の年齢の成人であろうと、新しいシナプスは絶えず生成されていたはずなのである。このことは、明らかに本論文の議論を裏付けている。
4. しかしながら、成人の学習と訓練について論文中に取り上げられていない問題がひとつあり、しかも、これは私にとってそれはきわめて重要な意味を持つ。本論文は、成人が「どのように」学ぶか———ということは、どのようにすれば最もよく学ぶか———について、年齢や遺伝、学習の機会など、特定の要因に照らして論じている。実証的な精神科学と教育研究の分野から学習を概観する場合、実際に「何を」学ぶのかという点は問題ではないように見えるのである。学習する内容は、たとえば美術史から情報技術、エアロビクスと、さまざまなものが考えられる。そしておそらく、所定の内容を教え学ぶための主たる手段は、教師と学習者が共有する言語、つまり日本語やドイツ語、あるいはその他の言語になるだろう。したがって、「どのように」と「何を」は本質的に別個のもので、相互にまったく独立しているといえる。かつては、英語教育においても英語は学習者の母語を媒介として教えられた———残念ながら、世界中の多くの国で現在でもそれが続いている———ため事情は同じであり、講座は教師がほとんど講義形式で提供しなければならず、また、内容は文法解釈と母語への翻訳に偏重していた。この教育方法は、長年かけて培われてきた伝統から導かれたものである。

- 5 . 実際の面からいうと、この方法のもたらす結果は、無惨なものであったし、今もなお無惨である。青年期に、家庭での学習は除いて 1000 ないし 2000 時間の英語教育を受けた若い成人が、いざ英語を使わなければならない土地へ旅行し始めると、自分の長年の苦勞は報われず、なんら実益をもたらすこともないと気づくことが少なくない。たいていの場合、相手の口から繰り出される英語の長文が理解できず、並みの長さの簡単な会話もできず、短い物語でさえ読みこなして楽しめるほどの読解力もなく、たった一枚手紙を書けば間違いだらけで、理解不能な発音で聞き手を混乱させ続けるのである。これは、方法——「どのように」教授と学習を行うか——が、目標とする成果——「何を」習得するのか——に結びつかなかったことを表している。それはまた、時間とお金、労力、知的努力、インフラ、そして人材の浪費を示す痛々しい証拠でもある。
- 6 . だが幸いなことに、ここ数十年、この伝統的な方法から方向転換をはかる英語教育(および外国語教育全般)の教師が増えている。英語はコミュニケーションのための重要な手段であるという認識によって、教室での実践の方向が徐々にではあるが根本から変わろうとしているのだ。学習者の母語は、もはや目標、すなわち英語習得への手段ではない。「何を」学ぶかが「どのように」学ぶかと重なって、伝達手段と伝達内容の区別がはっきりしなくなっている。英語の習熟を目指す学習者は、その目標達成の手段としても英語を使う。学習者の限られた英語力が、より高いレベルへの到達の跳躍台になるのである。そして、目標のレベルに十分到達すれば、学習者はさらに高いレベルへと進んでいく。学習の過程で、語彙や文法規則、綴りや発音の規則といった新たな知識が必要とされるのは部分的でしかない。教室での実践の本質は、コミュニケーションをはかるためのスキル、つまり、話し、聞き、読み、書くという技能の育成である。旧来の、事実に基づく知識の蓄積は、言語スキルの発達にその座を譲ったのである。
- 7 . こうした取り組みに必要となるのは、高い技能を持ち、十分な訓練を受けた教師である。教師は、常に既習のスキルと知識の上に積み上げを行いながら、クラスを注意深く次の段階へと導いていく必要がある。その際は、純粹に言語的なスキル(言語の正確さや流暢さなど)の進歩を促すばかりでなく、学習者の自信を高め、学習継続への意欲を維持していかなければならない。
- 8 . そうした教師が必要とされるのなら、TEFL(外国語としての英語教育)や TESL(第二言語としての英語教育)、あるいはもっと一般的に TESOL(他言語話者のための英語教育)といった、入念に立案された教員準備講座が用意されなければならないことはいうまでもない。教職就業に向けた準備の間、意欲的な志願者は、もはや専門科目——言語学や教育学——の研究主体に取り組むのではなく、コミュニケーションのための英語を教えるうえで、伝達手段として英語を用いる教育方法について、広範囲にわたる訓練を受ける必要がある。
- 9 . この点に関して、私は恵まれていた。20 年以上にわたる英語教育の業務の中で、教員の養成や研修を数多く経験してきたからである。世界中の実にさまざまな地域から集まった受講者は、その英語力、母語、既習歴、文化的・国民性的特性、あるいは個人的な動機といった要因により、成人学習者として多種多様であることがしばしばであったが、すべての講座にいつも学習という赤い糸が一本通っていた。受講者は例外なく学習をしたし、もっと重要なことには、学習すると同時に、講座の基礎をなす英語教育の原則を理解し、その価値を認めたのである。

10. では、英語教育(もっと広くいえば外国語教育)の教員養成プログラムに必要な共通要素とは何なのか。また、教員養成において必ず遵守すべき原則とは何か。旧来の要素の中で、もはや価値があるとも必要であるとも考えられず、無益無用なものとして廃棄すべきものは何か。そして、TESOL(他言語話者のための英語教育)に絶対必要な要素とは何であり、いかなる講座でもその要となるものは何か。私の考えでは、本格的に検討すべき7つの要素が挙げられる。

(1) 英語や教育学および教授法に関する知識は、これまでも常にそうであったように、今もその地位を保っている。なぜなら、英語を教える専門家は、その内容について知っていなければならないからである。だが、こうした知識はすべて、実際の英語教育のクラスで行われることと、もはや離れたものではない。かつて、教員準備プログラムといえば、教育学や言語学に関する理論がかなり組み込まれていたものだが、そのような授業科目ではもはや十分とは見なされない。知識や理論は、将来、教師として現場で必要となるものと、直接的であれ間接的であれ何らかの関連ある場合にのみ、プログラムに入れられるべきである。もしそれで、伝統ある中世英文学や古英語学の講座を削る必要が生じるというのなら、それもしかたがないだろう。

(2) このことから、もうひとつの原則、すなわちすべての理論が教授や学習の現場での実践と一体化していなければならないという原則にいき着く。TESOL(他言語話者のための英語教育)のプログラムには、現場で教える専門家が必要とするものと関連のない、象牙の塔での学問を加える余地はない。理論的な内容を加える場合は、必ず、実際の英語教育で活用できるかどうかを考えて判断されるべきである。そしてもし、ある理論上のモデルと、実践上の現実問題に対するその妥当性の隔たりが、TESOL の授業科目の中で埋められないのであれば、その理論はカリキュラムから排除されてしかるべきである。

(3) プログラムの主要部分が、教授法や教授技術、また、その基礎をなす理論的根拠の学習にあてられる必要がある。このため相当量の教育実習が受講者に課されることになり、またその結果として、受講者の実習成果についての指導教員による評価も、相当量求められる。こうしたプロセスは、労働集約性が高く資源配置も複雑さを極めるため、きめ細かな計画と多くの人材が欠かせない。わずか 4 週間(たとえば、私の担当したカナダでの講座)というものであれ、4 年間に及ぶ(たとえば、私がメキシコで担当した大学の TEFL 学位のコース)ものであれ、さまざまな形態の実践課題を、教員養成プログラムのまさに最初から最後まで設定しておかなければならないのである。

(4) こうした原則を推進していくなら、当然のことながら、指導教員が TESOL のプログラムを提供するまさにその方法にも、この理論の提唱する内容が反映されていなければならないということになる。第一に、指導教員には、英語教育のクラスで経験をかなりの程度積んだ EFL や ESL の教員が望ましい。したがって、教員養成プログラムの講座内容(授業計画における「何を」にあたる部分)は、必ずそのプログラムの提供方法にも反映されていなければならない。つまり、理論上のモデルで示されている技術はすべて、そのモデルを教授する授業で実際に実践してみせるということである。たとえば、ペアワークによる討論——あるいはゲームやロールプレイ——が、EFL や ESL のクラスできわめて有用であるという議論があれば、教員養成講座の受講生に対しても、ペアワークやゲーム、ロールプレイという同様の技術が用いられるべきである。その講座が方法論にどれほど重きを置いているかは、その講座の提供方法によっ

て測られる。そのため、旧来の方法で講義を行うだけの指導教員がふさわしくないのはもちろんである。「人に説くことは自ら実行せよ」とは、教員養成プログラムの真髄ともいえる原則である。

(5) 教員受講者が、学習者とコミュニケーションをはかりながら教えるということには多様な価値があることを理解するうえで、非常に有効な——私は必須と考えている——方策がひとつある。それは、受講者の誰もが使わない、なじみのない外国語(UFL)の学習を TESOL プログラムに導入することである。教員受講者は、たとえば、セルビア・クロアチア語やアラビア語、スペイン語、ヘブライ語といった、まったく新しい未知の外国語を習得しようとする初学者の立場に身を置くことになる。受講者は、そのような体験的学習を通じて例外なく、学習者の気持ちがよく理解できるようになり、語学の教師には何が求められているかがわかるようになる。教員受講者がそこから何を学ぶのかをもっと具体的にいうなら、新しい外国語学習を始めることが、学習者にとっていかに大変で心理的なプレッシャーとなるかということ、また、たとえ初級レベルであっても、成果を挙げることが、いかにやりがいや楽しさを感じさせるかということ、教師にとって発声が明瞭で、視覚教材や身振り、物まね、顔の表情の創意工夫に長けていることがいかに大切かということ、教師の忍耐と励ましがいかに重要かということ、そして、教師が未知の外国語だけを使って、つまり学習者の母語にまったく頼らずに教えることは十分実行可能だということ、である。この外国語体験学習は、半時間という短いものから、週に 2 時間を 10 週間という長期にわたるものまでが考えられ、反省や分析を行う各種の課題(たとえば、グループ討議、心理的な効果についてのアンケート、授業の記録)が設けられる。多種多様な環境や場所(メキシコ、カナダ、インドネシア)で、UFL を専門的に観察してきた私の経験からいえば、教員受講者が外国語の初学者という立場に置かれ、そこで得る洞察はきわめて重要なものである。英語を教えたいという強い意欲を持つ教員が、自分の母語も英語である場合、したがって、自身は正規の授業で英語を習得した経験がない場合、これは特に貴重である。

(6) さらにもうひとつ、教員受講者が——それまでに身につけた学習習慣次第では——習得の必要があるものに勉学のスキルがある。教員受講者は、学習戦略のうち、何が有効で何がそうでないかを知っておかなければならない。たとえば、自身が学生時代に培った間違った学習習慣(たとえば、試験前の詰め込み勉強、しぶしぶやる運用練習、歩き回りながらの教科書丸暗記など)のために、その善し悪しが十分にわからないのであれば、まず「学習方法を学習する」必要がある。これには、ノートのとり方、図書館の活用方法、分析的思考、意見の発表、問題の解決などが含まれる。ELT の教員に、本人も実践したことのない適切な勉学のスキルを教えるよう期待するのは、非現実的である。

(7) 重要なことをひとつ言い残したが、英語以外を母語とする教員受講者のための教員養成プログラムでは、受講者自身の英語力を向上させることが必要である。就業前講座では、受講生が自分の語学レベルを引き上げる意義に気づくことが多く、英語で行われる TESOL の全プログラムに積極的に従うため、英語はかなり上達する。そのため、指導教員が受講者の母語を使えるか否かに関わりなく、他の言語で提供すべき講座は、あったとしてもごくわずかである。しかしながら、ときとして、現任教員の研修においては、ベテランとされる英語教員が英語のレ

ベルアップに対して抵抗感を示すことがある。実際のところ、そうした教員は、英語教育の仕事をそれまで経験してきたにもかかわらず、英語力の向上が大いに必要であることを自ら実証してしまう——本人に自覚はないのだが——ことがしばしばである。このような教員は、どうしても必要ということではないが、一般に英語力をさらに高めることが望ましい。

11. まめとして、成人向けに英語教育のための研修と準備を行うプログラムが最も重視すべき原則を以下に挙げる。

- (1) どの理論も、実際の教育現場での利用と無縁ではない。
- (2) 理論と実践に一体性がある。
- (3) 講座全体を通して、実践的な教授課題が組み込まれている。
- (4) 指導教員は、教えることを自らも実行する。
- (5) 未知の言語の講座を設ける。
- (6) 必要であれば、勉学のスキルを教える。
- (7) 必要であれば、英語力向上のための講座を設ける。

12. TESOL 講座に対して責任を負うプログラムの立案者には、成人受講者が可能な限り最善の方法で学習し、研修を受けられるようにするという専門家としての責務がある。後日、講座の修了者が英語教育の専門家として活動を始めれば、今後は、彼らがクラスの中で手本となり、将来に向けて勉強する学習者の学習過程を支えることになる。私たちは、実証的研究の結果に助けられることで、成人のための最も効率的で効果的な学習環境を作り出して、人的資本への投資を行うことができる。今まさに、そうすべき時期にきているのである。

[コメント]

学習成果をあげるための教員養成の前提となる考え方とその具体策の 7 項目は、とても参考になる。是非、実行に移したい。